

イスにおける、連邦と各州、州相互の財政調整の成功が詳しく述べられている。

本書のそれぞれの章は、「補完性原理」や「近接性原理」と関連づけられてはいるが、今日もなおかなり多義的に理解され用いられている「補完性原理」そのものの概念や歴史、また、現

在ヨーロッパで進みつつある、国家の下位領域である「地域」への分権化の理念との関連を通観し整理する一章が是非とも欲しかった。もともと本書にはそれが予定されていたが、執筆者の事情で実現しなかったのは非常に残念である。

鈴木光太郎著

『オオカミ少女はいなかった 心理学の神話をめぐる冒険』(新曜社、2008年9月発行、2600円+税)

●—————武川 一彦

書名は伏すが、私が学生時代に使っていた教育学の教科書に次のような一節がある。「人間は、生理的な成熟を土台としながら、社会的・歴史的な人間的・文化的環境との相互交渉のなかで、学習を通じて、さらには学習の意図的な指導である教育を受けることによって、人間としての成長・発達をとげる。こうした人間の発達にとっての文化と教育の本質的な意味を私たちに示してくれるのは、人間の社会と文化から隔絶したところで育った孤立児や野生児(動物に育てられた子)の事例である。これらの事例のうち、信頼できる事実として日本でも広く知られているものに、フランスのアヴェロン野生児(18世紀末—19世紀前半)とインドの狼少女カマラ(1912—29)の場合がある」。本書のタイトルの「オオカミ少女」とは、この「インドの狼少女」のことにほかならない。「信頼できる事実として日本でも広く知られている」と記されていたオオカミ少女がいなかったのである。

これまでオオカミ少女は概ね次のように語られてきた。1920年にインドでオオカミに育てられていた2人の少女アマラとカマラが発見された。発見者のシング牧師は自らが経営する孤児院に引き取り、妻とともに献身的に2人の養育にあたる。アマラは発見の1年後に病死するが、カマラは9年間生き続けた。その間に、なんとか二足歩行はできるようになったが言語的なコミュニケーションはほとんど進歩せず最終的に

習得できた単語は45語でしかなかった。この事例からは、ヒトが人間となっていくためには人間の社会と文化のなかで学習をし教育を受けることが必要であることわかる、と。

著者はこのオオカミ少女の話が脚色・捏造されていたことを、シング牧師の残した資料(養育日記、写真)の矛盾を指摘しながら説得的に論じている。近年、教育関係者のなかでも「本当にオオカミに育てられたのか」、「自閉症ではないのか」などの疑問が出され信憑性をめぐり議論されることもあったが、本書が論争に決着をつけたと思われる。

本書はオオカミ少女をはじめ、サブリミナル効果や双生児研究など心理学の世界で「神話」となっている8つの発見・研究成果を検証している。著者は文化人類学者のドナルド・ブラウンにならない「学問の世界において、否定されたり反証が出たりしても、死に絶えることなく何度も不死のようによみがえる話」を「神話」と呼んでいる。それぞれの「神話」はどのように生まれ流布したのか、なぜ信じられ続けるのか。これを心理学の世界の内側だけではなく、広く社会状況とも関連させながら解き明かしていく。この検証の過程は心理学の門外漢である私には非常に新鮮でスリリングであった。

「神話」は心理学ばかりでなく様々な学問分野で存在するだろう。神話の呪縛を逃れるためにはどうしたらよいか。著者の答えは明快である。

「答えはひとつ。論理的にものを考える以外には、心理学が科学として認めてもらうには、とるべき道はそれしかない。そして原典にあたる

こと。噂に頼らぬこと。疑うこと。そうすれば、心理学のなかの似非科学の部分ははるかに少なくできるに違いない」。

大村はま著

『新編 教えるということ』(ちくま学芸文庫、1996年発行、840円(税込))

●—————山田 紀雄

この本の内容の一部は私が20年ほど前に読んだものであり、それが新しい内容を加えて“新編”として再構成され1996年に初版発刊、2007年5月に16刷発行されているものであり、新刊ではない。

「教育とは何か」「教えるとは何か」、今ほど改めてこの原点を考えなければならない時期はないだろう。教育の衰退が叫ばれ、子どもの低学力化や心の荒廃、教師の指導力不足など、学校と教師、生徒と教師、そして親と教師のそれぞれの役割とそのあり方などについて見直しと再構築が求められ、各学校では国の指導の下その取り組みが始まっている。しかし中学校・高校教育の現場からはその成果が上がっているとの声はあまり聞かれない。むしろ矢継ぎ早な方針変更や教育改革に戸惑いの感さえ上がり始めている。教師一人一人が「教育とは何か」「教えるとは何か」の原点を改めて問い直すことがまず大切であろう。その意図に沿って改めてこの本を読んでみた。

この本は、東京都教育功労賞やベスタロッチ賞を受賞した大村はまが74歳まで一教員として勤務した経験をもとに、その後の多くの教員研修や講演における講話の中から「教えるということ」「教師の仕事」「教室に魅力を」「若いときにしておいてよかったと思うこと」の四編を収録している。どの内容も見方によっては時が流れ世の中が変化し古い考えとも取られがちではあるが、教育という営みの本質からは時代を超えて通用する著者のメッセージがあると強く思う。むしろ、今の若い先生方や、これから教

職を目指す学生には、読まなければならない必読の一冊とも言えるものである。

この本(講話)全体を通して著者が伝えようとしていることは、プロフェッショナル=職業人としての教師のあり方である。具体的には“教師の資格は、研修することであり、研究をしていて勉強の喜び苦しみを日に日に感じていること、伸びたい希望が胸にあふれていること”として、教師は常に生徒と同じ次元に身を置くことを求めている。また国語の授業(大村はまは国語の教師で研究家)では“「読んでできましたか？」という検査官の教師は教師ではない”とし、さらには“作文を黙って家で書かせる批評家教師は、教えていない教師”であるとして厳しく戒めている。教室は指導する場、学習させる場であって、その中で読ませ、その中で書かせてこそその指導であり教師の役割であるとしている。極めつけは“「一生懸命指導したんですけど……」などと弁解する教師”が多いが、一般社会では結果が全てであるはず、教育の世界だけがその言葉で責任回避できるはずもないとして、このような甘えた考えや発言を“無責任な教師”として戒めている。また、講話「教師の仕事」の中では「いい人」「優しい人」「思いやり」「一生懸命」などの人間性は教師でなくとも当たり前に必要なものであり、未来の建設に役立つ人間を確実に育てるとする教師としての職業意識、即ち仕事のできる人が教師にふさわしい人間であるとしている。

このように、この本全体を通して教師の専門職としての心構えや考え方を丁寧に説明し読み